PG Lab ディスカッションペーパーシリーズ
第6号　2006年8月

Discussion Paper Series
No.6　August, 2006

ISSN 1880-9146

アンケート調査による性心理と性行動との関係のモデル構築：自我関与に関する社会心理学的研究

曹　陽

文部科学省私立大学社会連携研究推進拠点
関西大学政策グリッドコンピューティング実験センター

Policy Grid Computing Laboratory,
Kansai University
Suita, Osaka 564-8680 Japan
URL : http://www.pglab.kansai-u.ac.jp/
e-mail : pglab@jm.kansai-u.ac.jp
tel. 06-6368-1177
fax. 06-6330-3304

関西大学政策グリッドコンピューティング実験センターからのお願い

本ディスカッションペーパーシリーズを転載，引用，参照されたい場合には、
ご面倒ですが、弊センター（pglab@jm.kansai-u.ac.jp）宛に
ご連絡いただきますようお願い申しあげます。

Attention from Policy Grid Computing Laboratory, Kansai University

Please reprint, cite or quote WITH consulting Kansai University Policy Grid Computing Laboratory (pglab@jm.kansai-u.ac.jp).

アンケート調査による性心理と性行動との関係のモデル構築：自我関与に関する社会心理学的研究

曹　陽 *

Modeling the Relationship Between Sexual Psychology and Sexual Behavior Based on Questionnaire Surveys: Social Psychological Study of Ego Involvement

Yang　CAO

概要

本論文では、アンケート調査法による自我関与の測定方法を試みるために、関心と情報選択との影響関係に着目した。具体的には、10 代の若者を対象にして、彼らの性的関心と性情報の選択との間に存在している影響関係に関して、実証的研究を通じて、以下の知見を明らかとした。生物的要因と社会的要因の相互作用による影響が、性への関心の因子構造を未分化な状態から分化していく状態に移行するという過程において、多様な個人差が見られた。次に、それぞれの個人内において、（自分の関心に応じた）情報選択を通じて、異なる情報源がもたらす影響によって、性交行為への関心を促進する過程が明らかとなった。

Abstract

In this contribution, in order to test a method for measuring ego involvement using questionnaire surveys, attention was focused on the influence of sexual interest on the selection of information. Specifically, for youths in their teens, the following knowledge concerning the influence of sexual interest on information selection was clarified through empirical research. A variety of individual difference was observed in the process in which the influence of mutual workings of biological and social factors transforms the structure factor of interest in sex, from an undifferentiated to an increasingly differentiated state. Further, within each individual, through the selection of information in keeping with her or his own interests, a process of acceleration of interest in sexual intercourse, through the influence of different sources of information, has become clear.

キーワード：自我関与，性的関心，情報選択，個人差

Keyword: ego involvement, sexual interest, information selection, individual differences

---

＊ 関西大学大学院社会学研究科／関西大学政策グリッドコンピュティング実験センター

Graduate School of Sociology, Kansai University／Policy Grid Computing Laboratory, Kansai University

１　序

社会心理学分野における理論的・方法論的な研究知見は、政策立案を支援する社会シミュレーションシステムの開発のためのモデル構築に応用可能であると評価されている。本稿を含めた３つのシリーズ論文により、新たな性教育政策の立案を支援するのみならず、安価で緊急要請が高く見られる国際保健事業を支援するために、グリッド技術を用いたMASの開発と関連しているモデルの構築について論じる。

シリーズ報告の第１報では、アンケート調査による性心理と性行動との関係のモデル構築について、研究の背景や目的を紹介した。シリーズ報告の第２報とする本論文では、社会心理学者の髙木が定義した関与概念（自我関与、自己関与とも呼ばれる）[注1]に基づいて、アンケート調査法による関与の測定方法を試みるために、関心と情報選択との影響関係を明らかにする。

本論文は、主に４つの実証的研究により構成されている。研究１は、生物的要因による影響を条件操作した上で、2004年に実施した日本と中国の国際比較調査データを分析したものである。研究２～研究４は、2000年度に中国北京市で実施した大規模なアンケート調査データを再分析したものである。

２　性の発達段階説における性的関心の意味づけに関する検討

§2-1　研究１の目的

従来の知見では、性別の違いによって、性的関心に対する意味づけが異なると報告されている。しかし、性的関心における恋愛の側面と性交の側面を直接的に測定していないため、議論する余地を残している。

そこで、本研究では、日本性教育協会（1997）がまとめた性の発達段階説における性的関心の意味づけを、実証的研究によって明らかにする。すなわち、生物的・生理的・先天的要因による影響を基盤としている性の発達段階説に沿って、男女ともに実年齢が16～17歳、そして、男子の場合は精通年齢が13±1歳、女子の場合は初潮年齢が12±1歳という身体的側面の成長・成熟を意味する条件を限定したうえで、日本と中国という異なる文化圏の若者のデータを用いて、以下の仮説を検証する。

仮説１：性の発達段階説が正しいとすれば、日本の男女を比較すると、女子よりも男子の方が性交に対する関心は高いが、男子よりも女子の方が恋愛に対する関心は高いだろう。

注1　第１報の論文のpp.13-14を参照ください。

仮説２：性の発達段階説が正しいとすれば、中国の男女を比較すると、女子よりも男子の方が性交に対する関心は高いが､男子よりも女子の方が恋愛に対する関心は高いだろう。

仮説３：性の発達段階説が正しいとすれば、男子の場合は、恋愛に対する関心においても性交に対する関心においても、日中間の差異がないだろう。

仮説４：性の発達段階説が正しいとすれば、女子の場合は、恋愛に対する関心においても性交に対する関心においても、日中間の差異がないだろう。

§2-2　研究１の方法

調査時期

日本での調査は 2004 年 11 月に実施し、中国での調査は 2004 年 12 月に実施した。

調査手続きと調査対象者

中国北京市中心地域にある普通制Ｆ高校と日本大阪府吹田市にある普通制Ｋ高校に調査依頼し、授業中に調査票を一斉に配布し、用意された封筒に入れて回収した。回収率は 100%であった。

分析対象者

生物的要因による影響を条件操作として、①実年齢 16～17 歳で、②精通年齢 13±1 歳（男子）あるいは初潮年齢 12±1 歳（女子）という条件を満たす者のみ、本研究の分析の対象とした。最終的に、分析データ有効数は 598 人（中国男子 126 人、中国女子 177 人、日本男子 204 人、日本女子 91 人）であった。

分析項目

①フェース項目：性別、恋愛経験の有無、性交経験の有無

②恋愛関心（「ロマンチックな恋をしたい」、1 項目、５件法）

③性交関心（「性交を経験してみたい」）、1 項目、５件法）

§2-3　研究１の結果

仮説１についての分析

日本全員のデータを用いて、恋愛関心と性交関心を従属変数にして、男女間の t 検定を行った。その結果（表 1)、性交関心については、女子よりも男子の方が高いという傾向が認められ､恋愛関心については､男子よりも女子の方が高いという傾向が認められたので、従来の研究と同様の結果が得られた。よって、仮説１は支持された。

表１　性的関心における日本男女間の差異（全員のデータ）

		n	*M*	*SD*	*t*検定
ロマンチックな恋をしたい	日本男子	204	3.31	1.30	$t(293)=-4.169$ $p<.001$
	日本女子	91	3.96	1.02	
性交を経験してみたい	日本男子	203	4.06	1.03	$t(291)=9.197$ $p<.001$
	日本女子	90	2.86	1.04	

さらに、恋愛経験も性交経験も体験していない日本のデータのみを用いて、同じ分析を行った。その結果（表2)、性交関心については、女子よりも男子の方が高いという傾向が認められたが、恋愛関心については、男子よりも女子のほうが高いという傾向は認められなかった。よって、仮説１は一部しか支持されなかった。

表２　性的関心における日本男女間の差異（経験無のデータ）

		n	*M*	*SD*	*t*検定
ロマンチックな恋をしたい	日本男子	42	2.93	1.40	$t(51)=-.911$ $p>.05$
	日本女子	11	3.36	1.43	
性交を経験してみたい	日本男子	42	3.76	1.14	$t(51)=4.003$ $p<.001$
	日本女子	11	2.18	1.25	

仮説２についての分析

日本の分析結果を踏まえて、性の発達段階説における性的関心の意味づけを中国のデータによって検証する。

まず、中国全員のデータを用いて、恋愛関心と性交関心を従属変数にした、男女間の *t* 検定を行った。その結果（表3)、恋愛も性交も経験していない日本のデータと同様な結果が得られた。つまり、性交関心については、女子よりも男子の方が高いという傾向が認められたが、恋愛関心については、男子よりも女子のほうが高いという傾向は認められなかった。よって、仮説２は一部しか支持されなかった。

表３　性的関心における中国男女間の差異（全員のデータ）

		n	*M*	*SD*	*t*検定
ロマンチックな恋をしたい	中国男子	126	3.49	1.31	$t(301)=-1.377$ $p>.05$
	中国女子	177	3.69	1.23	
性交を経験してみたい	中国男子	126	3.14	1.45	$t(301)=8.466$ $p<.001$
	中国女子	177	1.88	1.14	

次に、恋愛経験も性交経験も体験していない中国のデータのみを用いて、同じ分析を行った。その結果（表4）、前述した結果と同様であった。つまり、仮説１の一部しか支持されていなかった。すなわち、性交関心については、女子よりも男子の方が高いという傾向が認められたが、恋愛関心については、男子よりも女子のほうが高いという傾向は認められなかった。よって、仮説２は一部しか支持されなかった。

表４　性的関心における中国男女間の差異（経験無のデータ）

		n	*M*	*SD*	*t*検定
ロマンチックな恋をしたい	中国男子	55	3.22	1.41	$t(135)=-.006$ $p>.05$
	中国女子	82	3.22	1.29	
性交を経験してみたい	中国男子	55	2.67	1.48	$t(135)=5.785$ $p<.001$
	中国女子	82	1.50	.89	

仮説３についての分析

まず、男子全員のデータを用いて、恋愛関心と性交関心を従属変数とし、国別間の t 検定を行った。その結果、恋愛関心については、日本の男子と中国の男子との間に差異がないことが認められた（$t(328)=1.205$, $p>.05$）。一方、性交関心については、日本の男子（$M=4.06$）よりも中国の男子（$M=3.14$）の方が、その関心が低いという傾向が認められた（$t(327)=-6.721$, $p<.001$）。よって、仮説３は一部しか支持されなかった。

次に、恋愛も性交も経験していない男子のデータのみを用いて、恋愛関心と性交関心を従属変数とした、国別間の t 検定を行った。その結果、恋愛関心については、日本の男子と中国の男子との間に差異がないことが認められた（$t(95)=1.004$, $p>.05$）。一方、性交関心については、日本の男子（$M=3.76$）よりも中国の男子（$M=2.67$）の方が、その関心が低いという傾向が認められた（$t(957)=-3.953$, $p<.001$）。よって、仮説３は一部しか支持されなかった。

仮説４についての分析

まず、女子全員のデータを用いて、恋愛関心と性交関心を従属変数とした、国別間の t 検定を行った。その結果、恋愛関心については、日本の女子と中国の女子との間に差異がないことが認められた（$t(266)=-1.742$, $p>.05$）。一方、性交関心については、日本の女子（$M=2.86$）よりも中国の女子（$M=1.88$）の方が、その関心が低いという傾向が認められた（$t(265)=-6.768$, $p<.001$）。よって、仮説４は一部しか支持されなかった。

次に、恋愛も性交も経験していない女子のデータのみを用いて、恋愛関心と性交関心を従属変数とした、国別間の t 検定を行った。その結果、恋愛関心については、日本の女子と中国の女子との間に差異がないことが認められた（$t(91)=-.344$, $p>.05$）。一方、性交関

心については、日本の女子（M=2.18）よりも中国の女子（M=1.50）の方が、その関心が低いという傾向が認められた（$t(91)=-2.263$, $p<.05$）。よって、仮説４は一部しか支持されなかった。

§2-4　研究１の考察

本研究では、日本性教育協会がまとめた性の発達段階説において、意味づけが曖昧であった性的関心に着目して、恋愛の側面と性交の側面を分別して実証的に検討することができた。

当該する性の発達段階説では、性生理、性心理、性行動という発達順序を述べており、本研究における４つの仮説が完全に検証される場合は、いわゆる生物的要因と社会的要因による相互作用において、社会的要因による影響よりも、生物的要因のほうが、より一層性的関心（恋愛に対する関心と性交に対する関心）を促進するという解釈が認められる。

しかし、実際に検討した結果によれば、恋愛も性交も体験していない者のデータを用いる場合は、日本にしても中国にしても、仮説１～仮説４はいずれも一部しか支持されていないことがわかった。具体的には、日本と中国のいずれの国においても、恋愛関心に対しては、男女間の差異が認められなかったが、性交関心に対しては、その差異が認められた。また、男子にしても女子にしても、恋愛関心に対しては、国別間の差異が認められなかったが、性交関心に対しては、その差異が認められた。

以上の分析結果から、思春期学的アプローチで整理してきた性の発達段階説において、意味づけが曖昧であった性的関心の２側面について、整理することができた。つまり、性的（恋愛）関心が性の発達段階説に沿っており、生物的要因と社会的要因による相互作用において、生物的要因のほうがその性的（恋愛）関心を促進する、という従来の知見[注2]で解釈できる。しかし、性的（性交）関心が全く性の発達段階説に沿っておらず、生物的要因と社会的要因による相互作用において、生物的要因のよりも、むしろ社会的要因の影響のほうが性的（性交）関心を促進する、という新たな知見が示唆された。

３　性的関心を促進する要因に関する探索的検討[注3]

§3-1　研究２の目的

注2　第１報の論文の pp. 8-11 を参照ください。

注3　研究２は、「思春期における性的関心の発達：性の発達をめぐる生物的要因と社会的要因に関する再考察」（曹、2004）という論文に基づいて、修正・加筆したものである。

本研究では、中国北京市の若者を対象にして、「･･･したい」という同一な測定水準に基づき、性的関心の２側面を反映している恋愛（「ロマンチックな恋をしたい」の１項目）と性交行為（「性交を経験してみたい」の１項目）を別々に用いて、学年別と性別と地域別による差異について検討する。つまり、生物的要因(学年別)、生物的要因と社会的要因（性別)、同一文化圏における社会的要因（地域別）が、恋愛に対する関心と性交行為に対する関心の発達に及ぼす影響の異同を、探索的に検討することを目的としている。

§3-2　研究２の方法

調査概要

2000年2月から、サンプル抽出の検討を含めて準備作業に着手した。本調査を実施する前に、北京市教育委員会と北京性健康教育研究会のリーダー、青少年の教育研究に従事する研究者と学校現場の教育者らに調査票とサンプル抽出の計画書を提示し、アドバイスを求めた。そして、調査の実施を許可してくれる学校の範囲内で、最終的に３ヶ所の中学校と６ヶ所の高等学校を対象にして、調査を依頼した。中国の中学・高校では９月1日が入学日であるため、本調査の中学１年生とは、中学校に入学したばかりの新入生で、教育水準では小学校６年生に相当すると考えられる。この点について、以下の分析結果を解釈する際に特に注意する必要がある。

サンプルの抽出

中国の大都市である北京市には、地域差がある。本調査では、北京市の社会調査でよく使われる「市中心」、「近郊」、「遠郊」という地域区分を採用した。なお、近郊でも、市中心と隣接する地区では、地域差があまり顕著でないところを避けてサンプルを抽出した。また、中国北京市の中学校と高等学校は、市重点学校（進学率が高い）と非重点学校（進学率が普通)、高等学校には普通制の高校と職業制の高校も含まれている。

調査実施期間

調査は、2000年9月5日から同月28日の間に実施した。

調査手続き

各校の指導者（校長や教頭）の指示に従い、自習時間（20分～30分）を利用して、全員に調査票を配布し、回答を求めた。なお、被調査者のプライバシーを守るために、無記名で回答した調査票を事前に用意しておいた両面テープ付きの封筒に入れさせ、完全に封をしてから調査担当者に手渡すことを原則とした。調査票の回収率は100％で、分析データの有効数は6125であった。

分析対象者

学校種類については、非重点の普通制学校に限定して、中学２年生(平均年齢およそ13歳、教育水準は中学１年生に相当する)と高校２年生(平均年齢およそ16歳、教育水準は高校１年生に相当する)のデータ（n=2557）を再抽出して、分析の対象とした。

分析項目

①フェース項目：性別（生物的要因と社会的要因の相互作用による影響を測定するため）、学年別（生物的要因による影響を測定するため）、地域別（社会的要因による影響を測定するため）。

②恋愛に対する関心（「ロマンチックな恋をしたい」）と性交行為に対する関心（「性交を経験してみたい」）について、それぞれ「全く当てはまらない」（１点）から「よく当てはまる」（５点）までの５件法で回答を求めた。

§3-3　研究２の結果

恋愛に対する関心を従属変数とした３要因の分散分析

「ロマンチックな恋をしたい」という性的関心について行った学年別(2)×性別(2)×地域別(3)の３要因分散分析の結果、すべての主効果と、学年別×性別、学年別×地域別、性別×地域別の交互作用が有意であった。しかし、学年別×性別×地域別の交互作用は有意でなかった。そこで、有意な主効果と交互作用(表5)の下位検定を行った結果、以下のことが明らかとなった。

学年別の主効果　中学２年生よりも高校２年生の方が、恋愛に対する関心が高かった。

性別の主効果　男子生徒よりも女子生徒の方が、恋愛に対する関心が高かった。

地域別の主効果　遠郊よりも市中心の生徒の方が、恋愛に対する関心が高かった($p<.05$)。しかし、市中心と近郊、近郊と遠郊の生徒の間に有意差はなかった。

学年別×性別の交互作用　中学２年生の場合、性別による差はなかったが、高校２年生の場合には、性別による差が有意であり($F(1)=22.386$, $p<.001$)、男子生徒よりも女子生徒の方が、恋愛に対する関心が高かった。他方、男女ともに、学年別による差が有意であり($F(1)=28.260$, $p<.001$; $F(1)=94.415$, $p<.001$)、いずれも中学２年生よりも高校２年生の方が、恋愛に対する関心が高かった。また、中学女子２年生と高校男子２年生の間にも有意差があった($p<.001$)。以上の結果から、高校女子２年生の恋愛に対する関心が最も高いことが明らかとなった。

学年別×地域別の交互作用　中学２年生の場合、地域別による差は有意でなかったが、高校２年生の場合には、地域別による差が有意であり($F(2)=12.908$, $p<.001$)、遠郊よりも市中心の生徒の方（$p<.01$)が、遠郊よりも近郊の生徒の方($p<.001$)が、恋愛に対する関心

が高かった。なお、市中心と近郊の間に有意差はなかった。他方、市中心、近郊、遠郊のいずれにおいても、学年別による差が有意であり（$F(1)=42.051$, $p<.001$；$F(1)=78.066$, $p<.001$；$F(1)=17.076$, $p<.001$）、中学２年生よりも高校２年生の方が、恋愛に対する関心が高かった。また、市中心の中学２年生と遠郊の高校２年生の間にも有意差があった（$p<.01$）。以上の結果から、中学２年生よりも高校２年生の方が、恋愛に対する関心が高いことが明らかとなった。

表5　恋愛に対する関心を従属変数とした基本統計（有意な主効果と交互作用のみ）

		n	*M*	*SD*
学年別の主効果	中２	920	2.31	1.36
$F(1)=133.064$ $p<.001$	高２	691	3.03	1.35
性別の主効果	男子	800	2.52	1.33
$F(1)=15.658$ $p<.001$	女子	811	2.72	1.46
地域別の主効果	市中心	500	2.74	1.38
$F(2)=7.091$ $p<.01$	近　郊	501	2.60	1.42
	遠　郊	610	2.55	1.40
学年別×性別の交互作用	中２×男子	447	2.30	1.35
$F(1)=13.511$ $p<.001$	中２×女子	473	2.32	1.37
	高２×男子	353	2.80	1.27
	高２×女子	338	3.28	1.39
学年別×地域別の交互作用	中２×市中心	296	2.42	1.35
$F(2)=7.594$ $p<.01$	中２×近　郊	332	2.23	1.30
	中２×遠　郊	292	2.30	1.43
	高２×市中心	204	3.20	1.29
	高２×近　郊	169	3.33	1.37
	高２×遠　郊	318	2.77	1.33
性別×地域別の交互作用	男子×市中心	250	2.50	1.25
$F(2)=5.785$ $p<.01$	男子×近　郊	248	2.52	1.35
	男子×遠　郊	302	2.54	1.39
	女子×市中心	250	2.98	1.46
	女子×近　郊	253	2.68	1.48
	女子×遠　郊	308	2.55	1.41

性別×地域別の交互作用　男子生徒の場合、地域別による差は有意でなかったが、女子生徒の場合は、地域別による差が有意であり（$F(1)=6.163$, $p<.01$）、遠郊よりも市中心の女子生徒の方が、恋愛に対する関心が高かった（$p<.01$）。しかし、市中心と近郊、近郊と遠郊の生徒の間には有意差がなかった。他方、近郊や遠郊の場合、性別による差は有意でなかったが、市中心の場合においてのみ、性別による差が有意であり（$F(1)=15.584$, $p<.001$）、市中心の男子生徒よりも女子生徒の方が、恋愛に対する関心が高かった。

性交行為に対する関心を従属変数とした３要因の分散分析

「性交行為を経験してみたい」という性的関心について行った学年別(2)×性別(2)×地

域別(3)の３要因の分散分析の結果、すべての主効果と学年別×性別の交互作用が有意であったが、学年別×地域別、性別×地域別、学年別×性別×地域別の交互作用は有意でなかった。そこで、有意な主効果と交互作用(表6)の下位検定を行った結果、以下のことが明らかとなった。

表６　性交行為に対する関心を従属変数とした基本統計(有意な主効果と交互作用のみ)

		n	*M*	*SD*
学年別の主効果 $F(1)=24.939$ $p<.001$	中２	926	1.79	1.26
	高２	691	2.11	1.36
性別の主効果 $F(1)=151.754$ $p<.001$	男子	804	2.31	1.43
	女子	813	1.55	1.05
地域別の主効果 $F(2)=10.374$ $p<.001$	市中心	503	2.13	1.35
	近　郊	500	1.81	1.22
	遠　郊	614	1.86	1.33
学年別×性別の交互作用 $F(1)=15.742$ $p<.001$	中２×男子	452	2.06	1.40
	中２×女子	474	1.54	1.05
	高２×男子	352	2.62	1.41
	高２×女子	339	1.58	1.06

学年別の主効果　中学２年生よりも高校２年生の方が、性交行為に対する関心が高かった。

性別の主効果　女子生徒よりも男子生徒の方が、性交行為に対する関心が高かった。

地域別の主効果　近郊よりも市中心の生徒の方（$p<.001$)が、遠郊よりも市中心の生徒の方（$p<.01$)が、性交行為に対する関心が高かった。一方、近郊と遠郊の生徒の間に有意差はなかった。

学年別×性別の交互作用　中学校においても高校においても、性別による差が有意であり($F(1)=42.790, p<.001$;$F(1)=119.897, p<.001$)、いずれも女子生徒よりも男子生徒の方が、性交行為に対する関心が高かった。他方、女子生徒の場合、学年別による差は有意でなかったが、男子生徒の場合、学年別による差が有意であり($F(1)=30.839, p<.001$)、中学２年生よりも高校２年生の方が、性交行為に対する関心が高かった。また、中学男子２年生と高校女子２年生の間にも有意差があった($p<.001$)。以上の結果から、高校男子２年生の性交行為に対する関心が最も高いことが明らかとなった。

３要因分散分析のまとめ

中学２年生と高校２年生の性的関心について行った以上の３要因分散分析の結果（表7）をまとめると、次のことが言えよう。

表7　３要因分散分析結果のまとめ

	ロマンチックな恋を 体験してみたい	性交を体験してみたい
生物的要因による影響(学年別) の主効果	中2＜高2	中2＜高2
生物・社会的要因の相互作用による影響(性別) の主効果	男子＜女子	男子＞女子
社会的要因による影響(地域別) の主効果	市中心＞遠郊	市中心＞近郊・遠郊
生物的要因による影響(学年別) × 生物・社会的要因の相互作用による影響(性別)	(高2のみ)男子＜女子 (男と女)中2＜高2	(中2と高2)男子＞女子 (男のみ)中2＜高2
生物的要因による影響(学年別) × 社会的要因による影響(地域別)	(高2のみ)市中心・近郊＞遠郊 (いずれの地域でも)中2＜高2	
生物・社会的要因の相互作用による影響(性別) × 社会的要因による影響(地域別)	(女のみ)中心＞遠郊 (市中心のみ)男子＜女子	

学年別の主効果では、中学２年生よりも高校２年生の方が、恋愛や性交に対する関心が高かった。

性別の主効果では、恋愛に対する関心は、男子生徒よりも女子生徒の方が、性交に対する関心は、逆に、女子生徒よりも男子生徒の方が高かった。

地域別の主効果では、遠郊よりも市中心の生徒の方が、恋愛や性交に対する関心が高かった。しかし、性交に対する関心は、市中心と近郊の間にも差が認められ、近郊よりも市中心の生徒の方が高かった。

学年別×性別の交互作用では、高校２年の男子よりも高校２年の女子の方が、恋愛に対する関心が高かった。しかし、性交に対する関心は、中学と高校のいずれにおいても、女子生徒よりも男子生徒の方が高かった。他方、恋愛に対する関心については、男子生徒と女子生徒とともに、中学よりも高校の方が高かったが、性交に対する関心は、男子生徒においてのみ、中学よりも高校の方が高かった。なお、高校２年の女子が恋愛に対して、高校２年の男子が性交に対して、関心が最も高かった。

学年別×地域別の交互作用では、遠郊の高校２年生よりも市中心や近郊の高校２年生の方が、恋愛に対する関心が高かった。他方、市中心、近郊、遠郊のいずれにおいても、中学２年生よりも高校２年生の方が、恋愛に対する関心が高かった。また、市中心の中学２年生と遠郊の高校２年生の間にも有意差があるために、中学２年生よりも高校２年生の方

が、恋愛に対する関心が高いことが明らかとなった。

性別×地域別の交互作用では、遠郊の女子生徒よりも市中心の女子生徒の方が、市中心の男子生徒よりも市中心の女子生徒の方が、恋愛に対する関心が高かった。

§3-4　研究２の考察

本研究では、中国北京市の市中心、近郊、遠郊における普通制中学の２年生と普通制高校の２年生を対象にして、学年別（生物的要因）、性別（生物的要因と社会的要因）、地域別（同一文化圏における社会的要因）の３変数を同時に扱い、それぞれの主効果と交互作用を検討することとともに、恋愛に対する関心と性交行為に対する関心の発達要因の異同を探索的に検討した。

まず、学年別の主効果について見ると、中学２年生よりも高校２年生の方が、恋愛や性交に対する関心が高い。この結果は、過去の知見と一致している。例えば、1989 年に中国で初めて行われた全国性文明調査（劉、1992）では、「異性と付き合いたい」[注4]と思う中学生（中 1～中３）は 23%～34%、高校生（高１～高３）は 69%～81%を占め、「異性の体に触りたい」と思う中学生は 5%～16%、高校生は 28%～36.7%であると報告されている。

次に、性別の主効果について見ると、女子生徒は、恋愛に対する関心の方が高いが、男子生徒は、逆に、性交に対する関心の方が高い。この結果も、中国と外国の先行研究の結果とほぼ一致している。例えば、先述した全国性文明調査（劉、1992）では、「異性と付き合いたい」とする男子生徒は 47.1%、女子生徒は 47.4%、「異性の体を触りたい」とする男子生徒は 28.0%、女子生徒は 8.4%であると報告されている。同じ項目を用いた JASE の全国調査第４回（日本性教育協会、1997）の報告書には、「異性と親しくなりたい」とする中学男子は 49.3%、中学女子は 57.1%を占め、「異性の体に触りたい」とする中学男子は 43.8%、中学女子は 13.8%であると報告されている。ちなみに、JASE の全国調査第１回と第２回の報告書（日本性教育協会、1976；1983）には、「異性と親しくなりたい」という「接近欲」と「異性の体に触りたい」という「接触欲」のいずれも、女子生徒よりも男子生徒の方が強いという報告があった。さらに、「異性への接近欲」よりも「異性への接触欲」における方が、性差が顕著であることも報告されている。

地域別の主効果では、市中心地域よりも、遠郊（農村）地域の方が、恋愛や性交に対する関心の低いことがわかった。この結果は、中国北京市の現状を反映していると言える。しかしながら、2008 年のオリンピック開催までは、北京市の発展が急激に進んでいき、周辺地域別へもその影響が及んでいくと予想される。

注4　この全国調査では、中学生用と高校生用の質問文が、1987 年度の JASE 全国調査票を参考にして作成された。意味合いを統一するために、日本の原調査票で「異性と親しくなりたい」という表現を「異性と付き合いたい」という形で中国語に翻訳した。

本研究で取り上げた中学２年生の平均年齢は 13 歳（12 歳～14 歳の年齢幅）であるため、身体的発達の開始時点で男女間の差異があるものの、それぞれの発達段階からみると、男女ともに、発達のピーク期に至っていない思春期の前期段階であると言えよう。一方、高校２年生の平均年齢はおよそ 16 歳（15 歳～17 歳の年齢幅）であるため、女子の方はすでに思春期の後期段階の年齢であるのに対して、男子の方はまだ思春期の中期段階に止まっていることがわかる。この身体的な性の発達段階説に基づき、身体的発達から心理的発達に及ぼす効果との関連から、有意差のある交互作用について、以下の解釈ができよう。

まず、学年別×性別の交互作用について、高校男子２年生よりも高校女子２年生の方が、男女ともに中学よりも高校の方が、恋愛に対する関心が高い。また、高校女子２年生の方が恋愛に対する関心が最も高いという結果から、恋愛に対する関心が今までにまとめた身体的な性の発達段階説に応じていることが明らかとなった。これは、恋愛に対する関心の発達が、生物的要因による影響が強いことを示唆している。一方、性交に対する関心については、中学と高校のいずれにおいても、女子生徒よりも男子生徒の方が高いこと、男子生徒においてのみ、中学よりも高校の方が高いこと、高校男子２年生の方が最も高いという結果から、今までにまとめた身体的な性の発達段階説に応じていないことが明らかとなった。言い換えると、性交に対する関心の発達が、生物的要因による影響よりも、社会的要因による影響が強いことを示唆している。

次に、学年別×地域別の交互作用と性別×地域別の交互作用では、遠郊の高校２年生よりも市中心や近郊の高校２年生の方が、遠郊の女子生徒よりも市中心の女子生徒の方が、恋愛に対する関心が高いという結果を得た。要するに、生物的要因と社会的要因の相互作用による影響が、より一層複雑に働いて、恋愛に対する関心を促進したとわかった。

本研究の結果を一言にまとめると、すなわち、「ロマンチックな恋をしたい」という恋愛に対する関心が、実年齢を軸とした思春期の発達段階説に沿っているため、学年別、性別、地域別をめぐる解釈が、いずれも可能となる。一方、「性交を経験したい」という性交行為に対する関心が、実年齢を軸とした思春期の発達段階説に沿っていないため、学年別、性別、地域別をめぐる解釈が、難航となっている。

松井（2002、2004）は、日本の首都圏にある複数の大学の大学生を対象にして、会話、デート、キス、恋人宣言、セックスから結婚へという恋愛の５段階について、1982 年と 2000 年の比較を行った。18 年間を隔てた両データを比較したところ、2000 年の調査結果と 1982 年データと同様に、会話から結婚へ至る段階がほぼ再現された。ところが、大きく異なっていたのは、「ペッティング」「セックス」で、これらの性的行動は、第５段階から第４段階に移ったという。つまり、18 年前の青年は恋人になってからセックスをしていたが、現代の青年はセックスをしてから恋人として周囲に紹介しているという変化は、時代による影響を強く受けていると解釈された。また、恋愛の流れや恋愛中に感じる気持ちは、時代を経ても、一定の普遍性があると述べている。別の言い方をすると、セックスと異なり、

恋愛に関する意識や行動は時代の変遷に伴っても、相対的に普遍性を持つことが示唆された。

教育発達心理学的アプローチでは、人間の発達に関する重要な知見として２つの説が並存している。１つは、段階を進むペースや最終に到達する段階で遺伝や環境による個人差を認めながらも、発達順序は必然的に定まっており、段階も普遍的なものとされる説である。もう１つは、人間は原則として遺伝的にも環境的にも、１人１人異なる条件下で生まれ育っており、いかなる心理・行動的側面にも必ず個人差は存在するというものである。すなわち、個人が絶えず変化していく環境と相互交渉して、能動的に変化していくことを前提に考えるという説である。

前者の説については、本研究における恋愛に対する関心の検討結果に当てはまると考えられる。一方、後者の説については、本研究における性交に対する関心の検討結果に当てはまると考えられる。このように、性の発達段階説によって解釈が不可能となる、性交に対する関心の促進要因とその影響過程を解明するために、「個人が絶えず変化していく環境と相互交渉して、能動的に変化していくこと」を前提に考える必要性が明確になった。

４　性的関心の因子構造の分化を促進する要因に関する検討

§4-1　研究３の目的

心理学においては、単一項目よりも測定尺度に基づいて、信頼性を確保することが有効な手段であると考えられている。そのため、「ロマンチックな恋をしたい」と「性交を経験してみたい」を含めて合計 13 項目で構成した「性への関心尺度」を作成し、因子構造の解明とそれに基づく尺度構成を検討した。ここで、本研究の下敷きとなる過去の分析結果を紹介する。

中国北京市における横断的研究　2000 年度北京市の横断的調査では、中学女子、中学男子、高校女子（普通制高校と職業制高校を含む）、高校男子（普通制高校と職業制高校を含む）の４群別に、性への関心尺度の因子分析を行った（曹・髙木、2003b）。その結果、女子に比べて、中学男子と高校男子の場合、２因子か３因子か、因子数の決定が難航した。因子数を２にすると、「異性・恋愛への関心」と「性交への関心」の因子構造となり、因子数を３にすると、「性の情報への関心」という第３因子が抽出された。他方、女子の場合、中学と高校のいずれにおいても３因子構造であったが、その因子の中身は幾分違っていた。中学女子生徒の場合は、男子生徒の３因子構造と同じく、「異性・恋愛への関心」と「性交への関心」と「性の情報への関心」であった。しかし、高校女子２年生の場合、「恋愛への関心」「性交への関心」「異性への関心」の３因子構造となったが、それは、2001 年度北京市市中心地

域のＮ高校男子２年生から得られた因子構造と全く一致していた。

中日両国の比較研究　日中比較を行うために、同じ教育年齢、同じ性別で、性器や体の仕組みなどの浅い性知識に止まる学校性教育を受けている、高２男子生徒を対象にして、性への関心尺度の因子分析を行った（曹、2003a）。その結果、いずれも３因子構造であった。日本の場合には、「性交への関心」＞「恋愛への関心」・「異性への関心」であったが、中国の場合には、「恋愛への関心」＞「性交への関心」＞「異性への関心」であった。日中間の差異を検討した結果、「恋愛への関心」について、日本よりも中国の高校男子生徒の方が僅かの差でやや高かった。一方、「性交への関心」においては、中国よりも日本の高校男子生徒の方が高く、その差が極めて顕著であった。以上の結果から、性交体験率がいずれも低い日中の高校男子２年生にとっては、「恋愛への関心」の方が、当該年齢層の身体的発達段階に沿っており、社会環境の違いに左右しないことが明らかとなった。ところが、「性交への関心」については、中国と日本における性の情報環境の違いにより、大きな差異が見られた。この結果から、「性交への関心」の発達に及ぼす社会的要因の影響が強いことを再確認できた。

中国北京市における縦断的研究　横断的・国際的研究における因子分析の結果を踏まえて、13項目で構成されている「性への関心」尺度のうちに、最も信頼性が高く見られる８項目のみを用いて、以下の分析を行った。すなわち、中国北京市の市中心地域にある学校を調査対象とした縦断的調査では、2000年度中１と高１の男・女、2001年度中２と高２の男・女の８群別に、因子分析を行った（曹・髙木、2004a）。その結果、中学の４群ではいずれも１因子構造であったが、高校の４群ではいずれも「異性・恋愛への関心」と「性的行為への関心」の２因子構造であった。

本研究の目的　2003年～2004年にかけて、「性への関心尺度」に関する一連の検討を行ったが、「異性・恋愛への関心」（5項目）と「性交行為への関心」（2項目）という２つの下位概念で構成された尺度を確認した。そこで、本研究では、中国北京市における横断的調査データの一部を再抽出して、８項目で再構成した「性への関心尺度」の因子構造を再検討することを目的としている。

§4-2　研究３の方法

調査実施期間

研究２と同じである。2000年9月5日から同月28日の間に調査を実施した。

分析対象者

研究２と同じである。中学２年生（平均年齢およそ13歳、教育水準は中学１年生に相当する）と高校２年生（平均年齢およそ16歳、教育水準は高校１年生に相当する）のデータ

（n=2557）を再抽出して、分析の対象とした。

分析項目

①フェース項目：性別（生物的要因と社会的要因による影響を測定するため）、学校別（生物的要因による影響を測定するため）、地域別（社会的要因による影響を測定するため）。

②性への関心尺度（8 項目）について、それぞれ「全く当てはまらない」（１点）から「よく当てはまる」（５点）までの５件法で回答を求めた。

§4-3　研究３の結果

学校別（中２、高２）×性別（男子、女子）×地域別（市中心、近郊、遠郊）の12群を分けて、それぞれに探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。

表8　各群における性的関心尺度の因子数

		因子構造の分化		
中2男子	市中心（n=138）	１因子構造：F1（q1～q8）		
	近　郊（n=160）	１因子構造：F1（q1～q8）		
	遠　郊（n=134）	１因子構造：F1（q1～q8）		
中2女子	市中心（n=148）	２因子構造：F1（q1～q5）	F2（q6～q8）	
	近　郊（n=168）	２因子構造：F1（q1～q5）	F2（q6～q8）	
	遠　郊（n=145）	２因子構造：F1（q2, q4, q6～q8）	F2（q1, q3, q5）	
高2男子	市中心（n=103）	３因子構造：F1（q6～q8）	F2（q1, q3～q5）	F3（q2）
	近　郊（n=79）	２因子構造：F1（q1, q5～q8）	F2（q2～q4）	
	遠　郊（n=155）	２因子構造：F1（q6～q8）	F2（q1～q5）	
高2女子	市中心（n=92）	３因子構造：F1（q6～q8）	F2（q1～q4）	F3（q5）
	近　郊（n=75）	３因子構造：F1（q6～q8）	F2（q1～q4）	F3（q5）
	遠　郊（n=151）	３因子構造：F1（q6～q8）	F2（q2, q3）	F3（q1, q4, q5）

「q1 異性の視線をつい意識する」、「q2 同性の人を手伝うのは嫌だが、異性の人ならば喜んで手伝ってあげる」、「q3 同性と付き合うより多くの異性と付き合いたい」、「q4 自分の存在を多くの異性に気づかせるように振舞う」、「q5 ロマンチックな恋をしたい」、「q6 性に興味がある」、「q7 テレビや映画等のキス・ベッドシーンを最後まで見たい」、「q8 性交を経験してみたい」

表8に示すように、中２男子以外の９つの群においては、関心の因子構造が分化された。そして、「q6. 性に興味がある」と「q7. テレビや映画等のキス・ベッドシーンを最後まで見たい」と「q8. 性交を経験してみたい」という３項目で構成された「性交行為への関心」

という因子が抽出された。また、表9に示すように、各群においてα係数が、いずれも.70以上に達したため、「性交行為への関心」を下位概念として採用した。

表９　性交行為への関心のα係数

		α係数
中２女子	市中心（n=148）	.768
	近　郊（n=168）	.708
	遠　郊（n=145）	.759
高２女子	市中心（n=92）	.767
	近　郊（n=75）	.832
	遠　郊（n=151）	.806
高２男子	市中心（n=103）	.754
	近　郊（n=79）	.787
	遠　郊（n=155）	.875

§4-4　研究３の考察

本研究では、SPSS による探索的因子分析法を用いて、性への関心尺度の因子構造を検討した。分析結果から、生物的要因と社会的要因の影響によって、性への関心の因子構造が、未分化な状態から分化していく状態に移行していることが明らかとなった（図 1)。

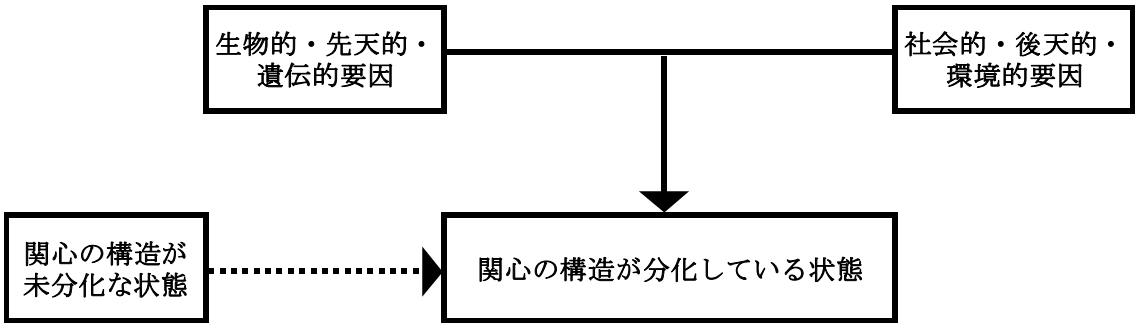

図１　性への関心の因子構造の分化を促進する要因

前述した研究１の分析結果によれば、生物的要因と社会的要因の相互作用が、恋愛と性交行為に対する関心の発達に及ぼす影響が異なっている。別の言い方にすると、生物的要因（学年別)、生物的要因と社会的要因の相互作用（性別)、同一文化圏における社会的要

因（地域別）の違いによって、思春期における「異性・恋愛への関心」、「性交行為への関心」という２側面を含める性への関心尺度の因子構造は、異なるだろうと推測できる。これは、本研究で検討している因子分析の結果と全く一致している。

８項目に再構成した「性への関心尺度」の因子構造の分化を促進する要因とその影響過程を解明し、生理的指標、心理的指標、社会的指標の測定をより厳密にするため、アンケート調査による測定方法をさらに改善する必要があると思われる。しかし、本論文の目的は、関心の喚起過程でなく、行動を規定する態度の形成過程に着目しているので、「性への関心尺度」に関する議論を、本論文で避けることにする。

「q6. 性に興味がある」、「q7.テレビや映画等のキス・ベッドシーンを最後まで見たい」、「q8.性交を経験してみたい」という３項目で構成される「性交行為への関心」は、尺度内における一貫性が高いため、下位尺度として使用することが適切だと考えられる。したがって、後述した実証的研究では、「性交行為への関心」という下位尺度のみを用いて、一連の検討を行う。

５　性交行為への関心の促進過程に関する検討

§5-1　研究４の目的

1980年代末から2000年までにかけて、中国北京市における情報環境が大きく変容した。まず、1985年から1993年にかけて、性を描写する出版物が出版業者の主要な収入源となり、盛んになった時期があった。その時点から、北京市は、性情報が無い時代からある時代に変化した。次に、文字というメディアと比べて、より視覚的な効果を強調する映像や写真が登場する時期に入った。1995年前後には、沿海地区からアダルトビデオ・VCDやコミック漫画が徐々に内陸の北京市に潜み込んできた。特に、1997年末から1998年にかけて、香港返還後の北京市の中心と隣接地域では、地方からきたお金を稼ぐ人達が、学校から帰宅途中の生徒らにアダルトVCDを売買するという街頭光景が一時的に社会焦点になった。

心理学的研究において、ポルノグラフィとは、性行為や異性の身体を描写した映像、写真、音声、文章などで、視聴者を性的に覚醒させるものであると指摘している（大渕、1991）。中国北京市におけるポルノ情報が目覚しく急増したという社会問題から、ポルノ情報が 10 代の若者の性意識と性行動を促進する要因として注目され、過去の研究で取り上げている（曹、2002；曹、2003a；曹・髙木、2003a；2004a；2004b）。

ここで、過去の研究を紹介する余地がないため、１例だけ取り上げる。前述した研究３の目的で紹介した中国北京市の縦断的調査では、因子分析に基づいて、性への関心（異性・恋愛への関心、性交行為への関心）の促進要因を検討した（曹・髙木、2004a）。具体的に

は、高校生男女ごとに、異性・恋愛への関心と性交行為への関心を従属変数に、調査年度(2)×恋愛経験の有無(2)×人からの影響有無(2)×マス・メディアからの影響有無(2)を独立変数にして、合計４回の４要因の分散分析を行った。その結果、男女ともに、異性・恋愛への関心と性交行為への関心のいずれにおいても、マス・メディアからの影響有無という主効果のみ認められて、マス・メディアによる影響が性への関心を促進することが検証された。また、性への関心における男女間の差異に関する分析では、マス・メディアからの影響の有無にもかかわらず、異性・恋愛への関心に対する男女間の差異が認められなかった。しかし、性交行為への関心の場合は、マス・メディアからの影響がないと認知した者の中に、男女間の差異が認められなかった。一方、マス・メディアからの影響がないと認知した者の中に、男女間の差異が認められて、つまり女子よりも男子の性交行為への関心が高かった（表 10)。

表 10　マス・メディアからの影響の主効果に関する基本統計量

		マス・メディアからの影響	*n*	*M*	*SD*
男子	異性・恋愛への関心	影響無	24	2.45	.73
		影響有	180	3.12	.84
	性交行為への関心	影響無	24	1.96	.92
		影響有	180	3.22	1.11
女子	異性・恋愛への関心	影響無	41	2.41	.68
		影響有	144	2.80	.73
	性交行為への関心	影響無	41	1.66	.79
		影響有	144	2.19	.94

以上の結果から、10 代の若者が思春期の前期段階から中期段階に移行する際に、マス・メディアにおける性情報の視聴が、異性・恋愛への関心と性交行為への関心を促進することが明確となった。また、性交行為への関心のみにおいて、男女間の差異を拡大する要因として、視聴者を性的に覚醒させるポルノ情報の視聴が取り上げられると推測できる。

そこで、本研究では、個人内における情報選択（非ポルノ情報の多様さ、ポルノ情報の多様さ）が、性交行為への関心を促進する過程を検討することを目的とする。研究３の因子分析に基づいて、性交行為への関心という下位尺度が抽出されていなかった中学２年の男子群のデータを、本研究から除外する。恋愛体験も性交体験も経験したことがない、中学２年の女子群、高校２年の女子群、高校２年の男子群という３群のみのデータを用いて、情報選択が性交行為への関心を促進する過程について検討する。

§5-2　研究４の方法

調査期間

研究２と同じである。調査は、2000年9月5日から同月28日の間に実施した。

分析対象

研究２と同じである。恋愛経験も性交経験もいずれも体験していない、中学２年の女子群（n=340)、高校２年の女子群（n=190)、高校２年の男子群（n=173)、合計703人のデータを再抽出して、分析の対象とする。

分析項目：

「性に関するあなたの行動や意識に、これまでどんなマス・メディアからの影響があったと思いますか？あなたの場合に該当するマス・メディアを、以下の項目からいくつでも選択し、その番号に〇をつけて下さい」と教示した。

選択肢として、「1. 公式的に出版発行した新聞・雑誌・文学小説」、「2. 公式的に出版発行した性教育用の書籍」、「3. 公式的に出版発行、放送した映像(テレビ番組・映画・ビデオ・ＶＣＤ等の一般に視られている映像)」、「4. 非公式的に出版発行した雑誌・小説・漫画（性的描写や表現が多い出版物)」、「5. 非公式的に出版発行、放送した映像(成人映画・アダルトビデオ・ＶＣＤ・ＤＶＤ等の性的な映像)」、「6. インター―ネット（ヌード写真などを含む性表現、性描写)」、「7. その他」、を取り上げた。なお、「7. その他」を選択した人は極めて少ないため、分析から除外した。

データの処理については、複数回答であるため、選択肢ごとに「いいえ」を０点、「はい」を１点と配点した。その上で、選択肢1～6の中から、非ポルノ情報源の多様さ（項目1, 2, 3）とポルノ情報源の多様さ（項目4, 5, 6）のそれぞれの合計点（０点～３点）を算出した。

§5-3　研究４の結果

多集団による共分散構造分析

個人内において、情報選択（非ポルノ情報の多様さ、ポルノ情報多様さ）が、性交行為への関心を促進する過程を検証するために、恋愛も性交も経験していない中学２年の女子群、高校２年の女子群、高校２年の男子群という多母集団による共分散構造分析モデルを構築した。その結果、適合度は χ^2=20.405　*df*=12　*p*>.05　*GFI*=.989　*AGFI*=.958　*CFI*=.988　*AIC*=86.405　*RMSEA*=.032 となり、モデルの当てはまりがよく採択水準に達した。図２に示したパス係数とその有意水準からみると、各群において、情報選択は性交行為への関心を規定する過程が異なると明らかになった。

中学２年生女子の場合は、非ポルノ情報源とポルノ情報源の間に偏相関を持ちながら、非ポルノ情報源のみの影響によって、性交行為への関心を促進する過程が認められた。

高校２年生女子の場合は、非ポルノ情報源とポルノ情報源がお互いに独立しながら、それぞれの情報源の影響によって、性交行為への関心を促進する過程が認められた。

高校２年生男子の場合は、非ポルノ情報源とポルノ情報源の間に偏相関を持ちながら、ポルノ情報源のみの影響によって、性交行為への関心を促進する過程が認められた。

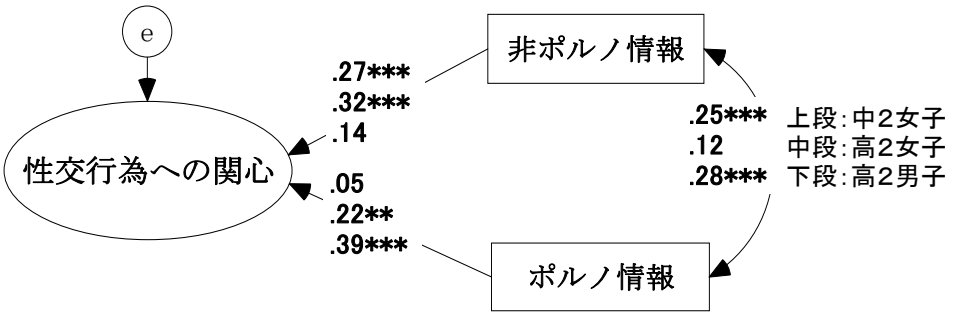

図２　３集団による共分散構造分析の結果（標準化解）

集団間の比較

共分散構造分析における集団間の差異をさらにわかりやすく解釈するため、性交行為への関心と情報選択（非ポルノ情報の多様さ、ポルノ情報の多様さ）を従属変数にして、中学２年の女子群、高校２年の女子群、高校２年の男子群の多重比較を行った（表 11)。

表11　基本統計と多重比較の結果

		M	*SD*	多重比較
性交行為へ関心の尺度得点（1～5点）	中２女子	1.62	.86	中女＜高女＜高男
	高２女子	1.88	.95	
	高２男子	2.55	1.11	
非ポルノ情報源の多様さ（0～3点）	中２女子	.86	.95	中女＜高女
	高２女子	1.12	.89	中女＜高男
	高２男子	1.07	.94	高女＝高男
ポルノ情報源の多様さ（0～3点）	中２女子	.13	.45	中女＝高女＜高男
	高２女子	.13	.42	
	高２男子	.62	.86	

その結果、中学２年の女子群と比べて、高校２年生の女子のほうが、ポルノ情報源の得点が極端に低くなっていること、高校２年生の男子がポルノ情報源の得点が極端に高くなっていることが明らかとなった。特に、高校２年生男子の場合では、性交行為への関心と

ポルノ情報源の得点がいずれも極端に高かった。

§5-4　研究４の考察

本研究では、恋愛経験も性交経験も体験していない者を対象にして、個人内における情報選択（非ポルノ情報の多様さ、ポルノ情報多様さ）が、性交行為への関心を促進する過程を、多集団による共分散構造分析と集団間の比較によって明らかにした。

まず、女子と顕著な差異を示す高校２年生男子の場合は、ポルノ情報の視聴と性交行為への関心の得点が極端に高かった。そして、非ポルノ情報源とポルノ情報源の間に偏相関を持ちながら、ポルノ情報源のみの影響によって、性交行為への関心を促進する過程が認められた。これらの結果から、ポルノ情報の視聴が、視聴者を性的に覚醒させるという働きが検証された。また、男女における情報選択の違いについて、日本性教育協会の 93 年度と 99 年度の全国調査の素データ[注5]を再分析した結果と比較しながら、解釈を進めていきたい。

表 12　性の情報源の基本統計と χ^2 検定（JASE 全国調査 93 年と 99 年）

*影響有=1点		テレビ・ラジオ		マンガ・コミック		アダルトビデオ	
*影響無=0点		*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
JASE 93年度	男（*n*=336）	.36	.03	.51	.03	.27	.02
普通中学校2年生	女（*n* =336）	.45	.03	.46	.03	.13	.02
	χ^2検定	χ^2=4.842 *p*<.05		χ^2=1.721 n.s.		χ^2=18.983 *p*<.001	
JASE93年度	男（*n* =243）	.46	.03	.53	.03	.51	.03
普通高校２年生	女（*n* =243）	.46	.03	.46	.03	.13	.03
	χ^2検定	χ^2=.008 n.s.		χ^2=2.667 n.s.		χ^2=79.905 *p*<.001	
JASE93年度	男（*n* =579）	.40	.49	.52	.50	.37	.48
普通中学校と高校	女（*n* =579）	.45	.50	.46	.50	.13	.34
の2年生	χ^2検定	χ^2=2.967 n.s.		χ^2=4.233 *p*<.05		χ^2=86.543 *p*<.001	
JASE 99年度	男（*n* =355）	.32	.03	.47	.03	.25	.02
普通中学校2年生	女（*n* =362）	.36	.03	.49	.03	.08	.02
	χ^2検定	χ^2=1.323 n.s.		χ^2=.120 n.s.		χ^2=36.472 *p*<.001	
JASE 99年度	男（*n* =277）	.48	.03	.65	.03	.56	.03
普通高校2年生	女（*n* =327）	.51	.03	.59	.03	.16	.02
	χ^2検定	χ^2=.831 n.s.		χ^2=2.789 n.s.		χ^2=106.616 *p*<.001	
JASE99年度	男　（*n* =632）	.39	.49	.55	.50	.39	.49
普通中学校と高校	女（*n* =689）	.43	.50	.53	.50	.12	.33
の2年生	χ^2検定	χ^2=2.720 n.s.		χ^2=.436 n.s.		χ^2=126.087 *p*<.001	

注5　原純輔が提供した「第５回青少年の性行動全国調査（JASE99）」と「第４回青少年の性行動全国調査（JASE93）」の素データは、「社会・意識調査データベースＳＯＲＤ作成プロジェクト」事務局から入手したものである。両調査に関する報告書（原・石川・加藤・日本性教育協会，1997，日本性教育協会，2001）には、本研究と関連がある分析を扱っていないため、再分析した。

上記の調査には、「テレビ・ラジオ」、「マンガ・コミック」、「ビデオ」の選択肢が設けられている。表 12 に示すように、テレビ・ラジオ（ポルノの少ない情報源）と異なり、ビデオ（ポルノの多い情報源）においては、男女間の差異が認められて、女子よりも男子の視聴が高かった。この結果は、従来の結果と一致している。ところで、「マンガ・コミック」については、男女間の差異が、93 年度では有意であったが、99 年度では有意でなかった。林（1991）は性的に使用可能な女というものをマンガ読者として拡大し消費の主体にも取り込む、という資本の戦略が発足・発展したものこそ、コミック・マンガの読者層には男女の割合が均等するようになったと指摘している。また、藤田は（2003）は「女の子がセックスをすることの意味は薄くなって、それがゴールじゃなくなっているし、相手の相性を確かめたりする、関係の１つ手段になっている…（中略）少女マンガにおいて、セックスの意味付けは明らかに 90 年代で変わった」と、述べられている。したがって、90 年代以後日本で出版・販売している少女マンガ・コミックの質と量が以前と大きく変わっており、それを購買読する読者層にとっては、性にかかわる行動や意識に影響を与える情報源の中から「マンガ・コミック」を取り上げた男女の割合が次第に均等するようになったと思われる。

Dworking（1989）は、長い歴史において、ポルノグラフィは男性の視点、男性の立場、男性のニーズに応じる所有物だと述べている。もし、男性と同じように、女性の視点、女性の立場、女性のニーズに応じるポルノグラフィが社会的に確立されれば、今まで調査データ上で現れていた顕著な性差が消えるかもしれない。実際には、近年以来の調査報告では、日本の男子高校生と比べて、女子高校生の性交経験率が著しく上昇する傾向が見られた（日本性教育協会、2001；東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会、1999；2002）。女性のためのポルノ情報の増加が、彼女らの性交行為への関心のみならず、性に対する態度や行動にも影響を与えると推測できる。これは、今後の課題として検証する。

本研究では、中学２年の女子群、高校２年の女子群、高校２年の男子群という異なる群において、性交行為への関心の促進過程が異なった。これについては、前述した研究３の検討によって解釈できる。ちなみに、生物的要因と社会的要因の相互作用による影響が、性への関心の因子構造を未分化な状態から分化していく状態に移行する過程において、多様な個人差を生じていることが示唆された。

６　全体的考察

本論文における４つの実証的研究を通じて、以下のような知見が明らかとなった。まず、生物的要因と社会的要因の相互作用による影響が、性への関心の因子構造を、未分化な状態から分化していく状態に移行する過程において、多様な個人差が見られる。次に、それ

ぞれの個人内において、(関心に応じた) 情報選択を通じて、異なる情報源がもたらす影響によって、性交行為への関心を促進する過程が明確となった (図 3)。

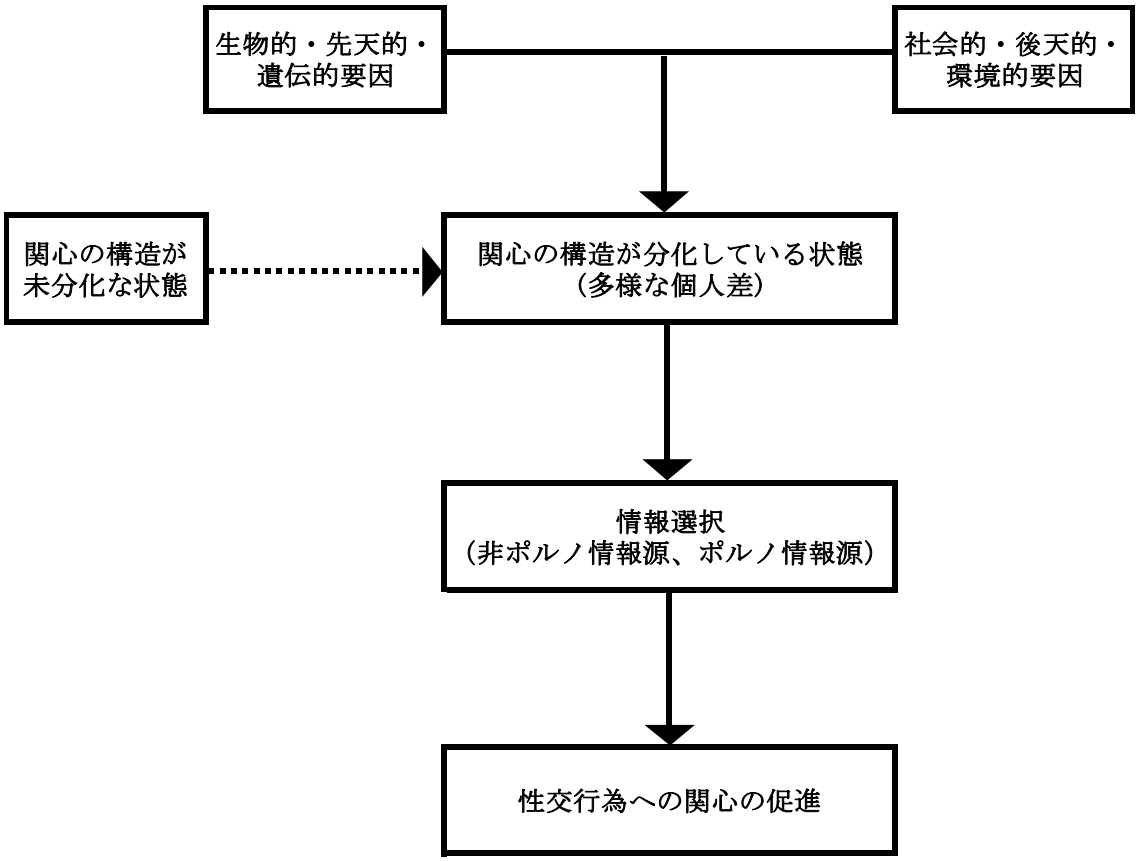

図 3　性交行為への関心の促進要因と促進過程

社会心理学における態度研究を歴史変遷の観点に切り替えてみると、1900 年代から 1960 年代頃まで社会心理学における態度研究は学習心理学から強い影響を受けていたため、主要な理論とされたのは、新行動主義すなわち強化理論であった。1980 年代以後の態度研究で、人間の認知理論や情報処理過程に着目する研究が盛んに行われていた (土田、1992; 2002)。

髙木は 1960 年代から 1970 年代にかけて、態度構造および態度と行動の関係に関する実証的研究において、関与は態度の構成成分や要素ではないが、態度の獲得・形成、態度の構造化および態度を行動に発現する場合等で重要な機能を担うと指摘している。さらに、関与の操作的定義を次のように述べている。すなわち、「対象が自分にとって重要であるか、対象に日ごろどの程度関心を持つか、対象に関する書物を自分から求めて読むか、対象について日ごろ他の人達と話し合うか」という 4 項目を取り上げている。この 4 項目を加算

して、関与の尺度得点を求めたが、項目間に影響関係をあるか否かを論じていなかった。本論文の６章では、髙木の知見に基づいて、特に関与という概念における関心と情報選択との影響関係に着目した。４つの実証的検証を通じて、図３に示した影響過程が明らかとなった。

個人内過程において、情報選択が性交行為への関心を規定することについて、1980 年代以後の態度研究の知見で解釈できるだろうか。そこで、精緻化見込みモデル（Elaboration Likelihood Model、以後は ELM と記す）の中心的ルートにおける「動機づけ」と「能力」との関係に着目した。図４に示したように、周辺的ルートと異なり、行動を予測できる中心的ルートにおいて、（初期）態度を規定要因として、説得情報を処理するための「動機づけ」と「能力」が取り上げられている。この両者の関係ににについて、ELM の提唱者である Petty & Cacioppo（1986）は、次のように述べている。

> “People are motivated to hold correct attitudes”
>
> “Although people want to hold correct attitudes, the amount and nature of issue-relevant elaboration in which people are willing **or** able to engage to evaluate a message vary with individual and situational factors”

下線で表記した部分については、研究者間で必ずしも一致しておらず、ELM の理解を混乱している。例えば、藤原（1995）は、「人は正しい態度をもとうとするが、その対象となる問題に関連した精査度（人はこの精査度に従ってメッセージの評価をしようとするし、メッセージの評価が可能である）の量と質は個人的要因と状況的要因に伴って変化する」としている。下線で表記したように、元の英文と１箇所だけ異なる意味合いで訳されているのは、次のような理由からである。要するに、Chaiken ら（1987）が提唱した Heuristic-Sytematic Model（HSM）では、「動機づけ」と「能力」との関係がお互いに独立でなく影響し合うとされ、そのことが強く支持されていたからである。

一方、藤原の共同研究者である神山(2002)は、Petty ら（1999）の最新研究を概観する中で、「人は正しい態度を持とうとするが、態度対象に関連した精査の量や質（この精査の量や質の範囲で、人はメッセージを評価しようとしたりあるいは評価することができる）は、個人的要因や状況的要因に伴って変化する」としている。

ELM に関する従来の実験的研究では、中心的ルートと周辺的ルートの交換問題を研究の焦点に当てたが、中心的ルートにおける「動機づけ」と「能力」との関係については、明確に言及していないのが、現状であろう。

アンケート調査を用いた本論文では、性交行為に対する態度の形成を規定する要因として、情報選択と性交行為への関心が取り上げられる。前者は、「能力」であって、後者は、「動機づけ」であると理解してもよいであろう。そこで、次回の報告では、態度形成を規定過程において、この両要因の関係も含めて態度に及ぼす影響について、さらなる検討す

る。

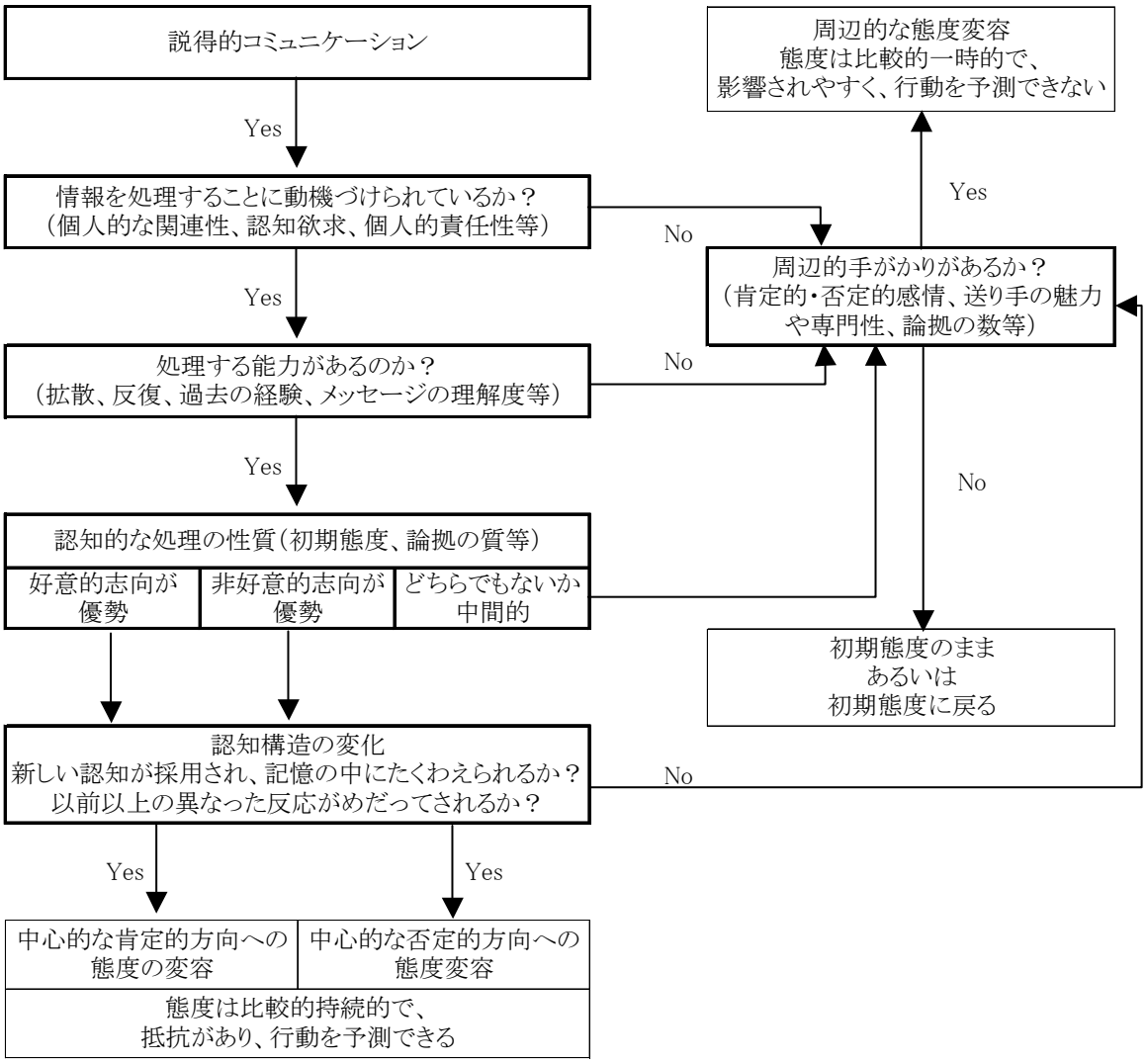

図４　説得にいたる２つのルートの図式化（藤原、1995）

引用文献

曹陽　2002　中国北京市中学・高校生の性(的)行動：学年・性別・地域による差の検討　国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，2，65-75.

曹陽　2003a　「性への関心」の因子構造の日中比較―大阪と北京の高校男子２年生において―　教育保健研究会年報，10，3-15.

曹陽　2004　思春期における性的関心の発達：性の発達をめぐる生物的要因と社会的要因に関する再考察　関西大学大学院社会学・心理学研究：人間科学，60，143-157.

曹陽・髙木修　2003a　中国北京市中学・高校生の性意識と性行動に及ぼすマス・メディアの影響（1）：学年・性別・地域による性の情報源の差異　対人社会心理学研究，3，103-109.

曹陽・髙木修　2003b　性への関心尺度の構造解明とそれに基づく尺度構成―探索的因子分析と検証的因子分析によって―　日本心理学会第67回大会論文集，1108.

曹陽・髙木修　2004a　思春期における性に対する態度の形成過程に関する社会心理学的研究(1)：精緻化見込みモデルに沿った、考えようとする動機付けと考える能力の関連性の検討　日本グループ・ダイナミックス学会第51回大会論文集，56－57.

曹陽・髙木修　2004b　思春期における性に対する態度の形成過程に関する社会心理学的研究(3)：精緻化見込みモデルに沿った考えようとする動機付けと考える能力の関連性の検討　日本心理学会第68回大会論文集，108.

Chaiken, S. & Stangor, C.　1987　Attitude and attitude change.　*Annual Review of Psychology*, 45, 241-256.

Dworking Andrea　1989　*Pornography－Men Possessing Woman*. New York: Elaine Markson Literary Afency, Inc.（寺沢みずほ(訳）1991　ポルノグラフィ―女を所有する男たち，青土社）

藤原武弘　1995　態度変容理論における精査可能性モデルの検証　北大路書房.

藤田由香里　2003　伏見憲明のトーク・セッション④：少女マンガが描く現代の愛と性　現代性教育研究月報，21(1)，7‐12.

原純輔・石川由香里・加藤秀一・日本性教育協会(編）　1997　若者の性はいま…－青少年の性行動第４回調査，小学館，94－97.

林完枝　1991　レディースコミック・フォアユー（大塚英志編）　少女雑誌論，東京書籍，265.

神山貴弥　2002　情報処理と説得：精査可能性モデル　深田博巳　説得心理学ハンドブック：説得コミュニケーション研究の最前線，北大路書房，418‐455.

劉達臨編　1992　中国当代性文化―中国二万例“性文明”調査報告，三聯書店上海分店，21-27.

松井豊　2002　青少年の「性」の心理学的背景，性科学ハンドブック７：セクシュアリティと心理学の最前線，日本性教育協会，43-53.

松井豊　2004　心理学ワールド―特集：愛の心理学　恋愛の心理学研究の現場から，25，5-8.

日本性教育協会編　1976　青少年の性行動―わが国の高校生・大学生に関する調査報告[第1回],小学館,19-21.

日本性教育協会編　1983　青少年の性行動―わが国の高校生・大学生に関する調査報告[第2回],小学館,18-22.

日本性教育協会(編)　1997　若者の性はいま…ー青少年の性行動第４回調査，性科学ハンドブック 3，　日本性教育協会，37-50.

日本性教育協会(編)　2001　若者の性白書ー第５回青少年の性行動全国調査報告，小学館.

大渕憲一　1991　暴力的ポルノグラフィー：女性に対する暴力、レイプ傾向、レイプ神話、および性的反応との関係，社会心理学研究，6(2)，119-129.

Petty, R. E., & Cacioppo, J. T.　1986　The Elaboration Likelihood Model of persuasion. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (19, 123-205). New York: Academic Press.

Petty, R. E., & Wegener, D. T.　1999　The Elaboration Likelihood Model: Current status and controversies. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual process theories in social psychology* (41-72). New York: Guilford Press.

東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会　1999　児童・生徒の性―東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告[1999 年調査]，学校図書，79.

東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会編　2002　児童・生徒の性―東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告[2002 年調査]，学校図書，15.

土田昭司　1992　社会的態度研究の展望　社会心理学研究，7(3)，147-162.

土田昭司　2002　態度変容研究としての説得研究　深田博巳　説得心理学ハンドブック：説得コミュニケーション研究の最前線，北大路書房，45 - 90.